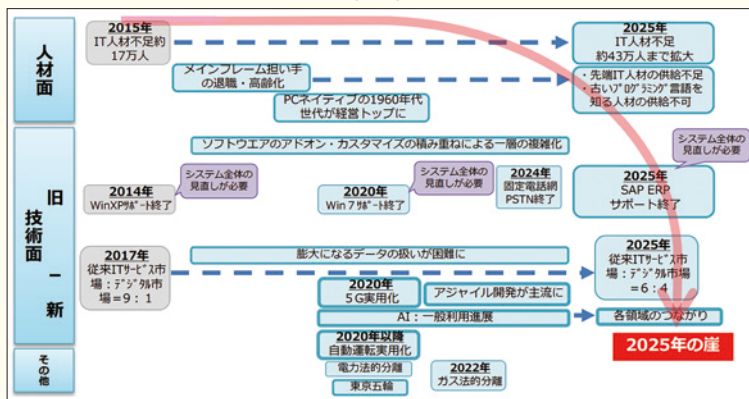


デジタルトランスフォーメーション (DX) について—「2025年の崖」とは

最近、新聞・雑誌等でよく目にするデジタルトランスフォーメーション(DX)とはどのようなものでしょうか。また、その背景にはシステム業界が直面することとなる「2025年の崖」があるといわれています。

経済産業省はDXに関して、平成30年5月に「デジタルトランスフォーメーションに向けた研究会」を発足させて検討を重ね、9月に中間とりまとめを公表しました。今回は、「2025年の崖」および「DXとはなにか」について簡単にご紹介します。

デジタルトランスフォーメーション(DX)の人材面、技術面



出所：経済産業省資料より当社作成

「2025年の崖」とは、DXを
実現できないことで、2025年
以降、最大12兆円／年の経済損失
が生じる可能性を指します。その
根本には、日本企業の多くがレガ
シーシステムを使用し続けている
という実態があります。レガシー
システムを、経済産業省は「技術
面の老朽化、システムの肥大化・
複雑化、ブラックボックス化等の
問題があり、その結果として経営・

「2025年の崖」とは

レガシーシステムの問題点

- 基幹系システムを21年以上使用する企業数が2015年20%→2025年60%となり、老朽化が進む
- 機能の追加によりシステムが肥大化・複雑化し、対応できるIT人材が不足する
- 各種システムのサポートが順次終了し、システム全体の見直しが必要となることもある

さらに、代表的な各種システムのサポート終了も大きな懸念事項です。2014年のWindows XPのサポート終了は記憶に新しいことと思えます。今後、2020年にはWindows 7、2025年にはSAPのERPのサポートが終了する予定です。

事業戦略上の足枷、高コスト構造の原因となるシステム」と定義されています。それを使い続けることにより生じる問題点を左図にまとめました。

システムの継続使用で老朽化が進むとともに、①既存システムに対応できる知識をもった人材が定年退職を迎え、技術者が不足する、②既存システムに、新たな機能のソフトの追加、自社向けカスタマイズの積み重ねの結果、システムの構成が複雑になる、③システム対応が属人化して他の者では対応できない、といった事態が起こるといわれています。

導入している企業は多く、その影響度は多大なものとなると予想されます。

DXとは

DXを、経済産業省は、「新たなデジタル技術を活用して新たなビジネスモデルを創出・柔軟に変換すること」としています。レガシーシステムのうち廃棄や塩漬けするものを仕分けし、必要なものについては刷新しつつ、旧システムの維持管理費支出のウェイトを低くすること、新たなデジタル技術をフルに活用してビジネス上投資効果の高い分野に資金をシフトし、新しいビジネスモデルを作り出していくことが求められています。

新たなデジタル技術としては、「5G(第5世代移動通信システム)」、「自動運転」、「アジャイル開発」、「AI(人工知能)」等があげられています。次回から、これらを順次紹介していきます。

(株)京都総合経済研究所
調査部長 榎館孝寿
研究員 古勝元彬

参考文献・HP
◆ 経済産業省「デジタルトランスフォーメーションに向けた研究会」レポート
http://www.meti.go.jp/press/2018/09/20180907010/20180907010.html